

先進校に学ぶキャリア教育の実践

地域や他学科・学年とつながるプロジェクトで 自己有用感を醸成し、社会で生きる力へ

矢板高校 (栃木・県立)

生徒の自己有用感の醸成を目指し、多彩な地域活性化の活動に取り組む矢板高校。
この数年間で、一部の学科の活動が他学科へも広がり、取り組み内容も深まってきました。
充実化のポイントは何か、また、生徒にはどんな効果があるか、同校の取り組みを探っていきます。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 自己有用感 🔍 学んだことの社会での実践 🔍 地域連携 🔍 学科間連携 🔍 学年間連携

自信と誇りをもって 社会に出ていくために

県内有数のりんご産地に位置する栃木県立矢板高校は、農林学校をルーツとする総合選択制専門高校だ。学科再編や近隣の高校との統合を経て、現在は農業経営科、機械科、電子科、栄養食物科、社会福祉科（19年度入学生より介護福祉科）の5学科を設置している。卒業後は地元で就職する者が多く、周囲からは「地域の担い手」を輩出する学校として期待されている。

そんな同校のキャリア教育のキーワードは「つながり」だ。学校と地域社会、そして異なる学科や学年のつながりにより、多彩な地域活性化に取り組んでいる。18年度は10種類以上の活動を行っており、連携先は産業界から行政、教育機関まで幅広い（図1）。

こうした活動の最大の狙いは「自己有用感の醸成」にあると、菅野光広校長は語る。

「最終的に目指しているのは、生徒に自信と誇りをもたせて社会へと送り出すことです。本校入学者には、勉強に苦手意識の強い生徒や、専門分野を学ぶ意義を見いだせていない生徒が少なくありません。そこで、地域に出て各学科の知識・スキルを使って活動することによって、自分が学んでいることが社会でどう役に立つかを確認し、自分自身が価値のある人間であること（ここが気づきつけ）にできればと考えています」

実績の積み重ねで 地域連携が加速

では、同校はどのように現在の多彩な活動を行うようになったのだろうか。遡れば十数年前から、農業経営科の小学校交流授業や、栄養食物科の商品開発、自作レシビカード提供など、一部の学科において地域連携の実績はあった。ただ、学校全体の活動にはなっていなかった。

転機となったのは、15年度に矢板市社会福祉協議会から「福祉のこころ推進校」の認定を受けたことだ。同協議会と協働し、学校全体で、シニアクラブ主催の各種イベント開催のサポートや、高齢者の外出

市議会との意見交換会



各学科や部活動を代表する生徒20人が参加。議員を交え、学校の学びを活かしたまちづくりについてグループディスカッションを実施。市内のイベントの知名度アップや、年齢や障がいの有無にかかわらず誰でも楽しめるカフェの設置など、各グループから出たアイデアを共有した。



School Data

1910設立／農業経営科・機械科・電子科・栄養食物科・社会福祉科(2019年度入学生から介護福祉科)
 生徒数534人(男子330人・女子204人)
 進路状況(2019年3月卒業生)大学4人・短大2人
 専門学校42人・就職113人・その他17人
 栃木県矢板市片俣618-2
 TEL 0287-43-1231
 URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/yaita/nc2/>



敷地内にはりんご園や田畑があり、和牛やヤギの姿も。

Outline

1910年に塩谷郡立農林学校として設立。1993年、学科再編を行い総合選択制専門高校となる。2011年に県立塩谷高校(普通科・社会福祉科)と統合。現在、5学科を設置し、他学科も学べる柔軟な教育課程により複雑化する社会で生きる力を育成している。15年に第9回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰。18年度に第8回キャリア教育推進連携表彰(文部科学省・経済産業省)奨励賞受賞。

約10年前、市商工会からの依頼により、同校栄養食物科が特産品のりんごを使っ

地域を背負って ご当地カレーを開発

地域との関係性が強まるなか、長期間にわたる大きなプロジェクトに関わるチャンスが増えている。その代表例が新カレー開発プロジェクトだ。

「地域から求められて活動する場合も、生徒にとってはすべて日頃の学びの実践の場です。ですから、地域に対し、『やっつああげる』ではなく『学びの場を提供していただいている』というスタンスで連携していきます」(菅野校長)

支援マップ協力店への周知活動など、地域福祉への理解と連携の推進に取り組んだ。これをはじめとする活動が高く評価され、同年、「キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」を受賞。「それによって方向性は間違っていないと確信できた」(菅野校長)と、同校の地域連携を加速させていく。県の各種研究指定事業に積極的に手を挙げ、予算確保にも力を入れるようになった。

また、高校生の若い力は地域課題の突破口になるのではないかと、地域も注目。矢板市商工会との連携・支援協定の締結や、農業教育支援を目的とした市農業委員会やJAなどの農業関係者による連絡協議会の発足など、各方面との連携体制整備につながった。18年度には、今後のまちづくりをテーマに、生徒が矢板市議会との意見交換や市長と懇談を行う機会も得た。

図1 2018年度の主な地域活性化活動

時間	活動	内容	参加生徒※					連携
			農	機	電	栄	社	
授業	矢高カレー開発	科目「課題研究」にて、市制60周年を記念した矢高ブランドのレトルトカレー開発プロジェクトに参加。				●	矢板市商工会、市内飲食店経営者、食品製造会社、矢板市応援大使	
	矢高りんごジュース開発	科目「課題研究」「総合実習」にて、同校で育てたりんごを使った果汁100%ジュースを開発。県の起業家精神育成事業。	●				塩谷地区農業教育連絡協議会、矢高応援団 (2・3学年合同)	
	矢高デイサービス	科目「課題研究」にて、各学科の専門性を組み合わせたデイサービスを年3回実施。	●	●	●	●	●	矢板市社会福祉協議会、企業
	小学校との交流	科目「課題研究」にて、最寄りの小学校と協働で田植えや稲刈り、収穫した米を使った調理などに取り組む。	●				●	市立西小学校、塩谷地区農業教育連絡協議会、栃木県教育委員会
	特別支援学校との交流	科目「課題研究」「総合実習」にて、特別支援学校の花壇整備やりんご狩りなどで交流。	●				●	近隣特別支援学校
課外	やいた軽トラ市のサポート	花苗販売やミニSL運行など、学科ごとの出し物でイベントを盛り上げる。	●	●	●	●	●	矢板市商工会
	JAまつり参加	地区の農業まつりにて、花苗販売、うどん・カレーの調理・販売などを実施。	●				●	JA、認定農業者会
	中学校で矢高フェア開催	市内を中心とした中学校に出向いて、各学科の学びに関する出前授業を実施。	●	●	●	●	●	市内を中心とした近隣中学校、栃木県教育委員会
	市議会との意見交換会	矢板市議会が開催する高校生との意見交換会に参加。議員と共に将来のまちづくりのアイデアを議論。	●	●	●	●	●	矢板市議会
	市長との意見交換	矢板市長が来校し、地域活性化につなげるための意見交換を実施。	●	●	●	●	●	矢板市長
部活動	駅前イルミネーション装飾	雪の結晶の形のイルミネーションを製作・設置。県の「高校生未来の職業人育成事業」の指定の夜活動。					●	電子技術研究部 矢板まちづくり研究所、企業

※農：農業経営科／機：機械科／電：電子科／栄：栄養食物科／社：社会福祉科

たレトルトカレーを開発したことがある。これをリニューアルし、地元の特産品を活用した新商品を開発・販売することで地域を盛り上げたいと、17年度、再び同校に協力の要請があった。市制施行60周年を記念する意味もあり、市内飲食店経営者、製造を担当する食品メーカーの他、矢板

市出身で「やいた応援大使」を務めるタレントやカレー研究家などもメンバーに迎えての一大プロジェクトだ。そこに加わったのが栄養食物科の生徒8人。科目「課題研究」のテーマとし、半年以上かけて新たなご当地カレーの開発に取り組んだ。そのプロセスは困難の連続だったという。



■新カレー開発プロジェクト

プロジェクトに参加した生徒は、外部のメンバーと共に検討会や研究を重ね、校内でもアンケート調査や試食会などを実施し、最後の検討会には3案を提出。そのなかから辛みを効かせたりんごカレーが選ばれた。

特に苦労したのは、レトルトカレーを通していかに矢板の良さをアピールするか。最初に生徒が考案したレシピは、外部メンバーからの厳しい指摘により、プランを白紙に戻して一から見直す事態に。生徒はシヨックを受けつつも、レトルト化に適する具材について食品製造会社に教えを請い、菅野校長が差し入れた全国各地のご当地レトルトカレーを研究。また、同校生徒に矢板のイメージに関するアンケートをとって具材選びの参考にし、試作を繰り返した。

最終的に、外部メンバーにも「胸を張って紹介できる」との評価をもらい、矢板産りんごや栃木県産の和牛ひき肉を使用した黒カレーが商品化された。リーダーを務めた3学年の山田真生さんは、「諦めずにやっつて、矢板の良さを集結させたカレーができ、自分もひとつ大人になれた気がする」

■やいた軽トラ市



農業経営科は花苗・野菜の販売やヤギのふれあい体験、機械科と電子科はロボット展示やポポポ自動車運行など、栄養食料科はポップづくり、社会福祉科は健康体操で会場を盛り上げた。



■中学校での矢高フェア



電子科は実際の装置を使って電気回路について解説し、栄養食料科は大根のかつらむぎの技術を披露するなど、学科ごとにプレゼンテーションを実施。



■学科単独の活動から 複数学科が共同で参加する活動へ

「と達成感を語っている。」

また、「福祉のこころ推進校」認定以来、従来は学科単独で行っていた活動を、他学科に広げる動きが活発化している。例えば、農業経営科有志が農業販売実習として参加していた地域イベント「やいた軽トラ市」に、現在は全5学科が参加し、各専門分野に関する出し物や販売を行うようになった。

「生徒は、花苗をつ販売するにもディスプレイやトークを工夫するなど、より効果的な方法を考えながら活動します。それを地域の皆さんに喜んでいただき、称賛や激励の言葉を掛けられることも多いようです」(滝澤幸憲教頭)

機械科・電子科のみが実施していた近隣中学校4校での出前授業は、18年度、全5学科有志による「矢高フェア」仕事と資格を学ぼう」として拡大開催。中学生に向け、自分たちが学んでいる各学科の学習内容について、実技を交えて紹介した。訪問する中学校の出身者を優先的に連れていくため、顔見知りの後輩に向けて誇らしげにプレゼンする姿が目立つという。また、同校は近年、定員割れが続いていたが、18年度の特徴選抜(推薦)の志願倍率が平均1.5倍に急上昇しており、矢高フェアで生徒が同校の魅力を伝えたことも影響している。

さらに、各学科の専門性を活かして協働で二つの目標に取り組み

さらに、学科間連携の方法は多様化している。単に同じイベントで各学科がばらばらに活動するのではなく、複数学科の専門性を組み合わせて共通の課題に対応しようという取り組みも出てきた。

その一つが、高齢者などの心身機能の維持・向上の支援に全5学科で取り組む「矢高デイサービス」だ。市社会福祉協議会と連携し、同校に社会福祉施設利用者や地域シニアクラブ会員を招くなどして、18年度は3回開催。機械科が校内の段差にスロープを設置し、社会福祉科が一緒に体操し、栄養食料科がおやつを提供するなど、各学科の専門性を活かして二つのデイサービスを成立させている。

また、電子科と社会福祉科が合同チームを組み、オリジナル福祉機器を製作した

■福祉機器の製作



電子科と社会福祉科の横断的な取り組みである。介護用スプーンや視覚障がい者向け段差検知白杖などのオリジナル福祉機器の製作は、日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスプラン・グランプリ」において全国ベスト100に選出された。

■矢高デイサービス



一見、福祉とは無関係に見える工業系の学科も、高齢者や障がい者のための仮設スロープの設置や、車いすのメンテナンス、LED電光掲示板の設置などでデイサービスに貢献。

例もある。16年度、介護現場を知る社会福祉科のアイデアと、電子科の3Dプリンターによるものづくり技術を組み合わせ、介護用スプーンを製作。17年度はその改良と、新たに視覚障がい者向け段差検知白杖の設計・製作を行った。今後はレンタルなどの幅広い使用方法を考え、地域に活かしていく計画だ。

「社会がそうであるように、本校には多



学科統括・進路指導部
篠崎昌彦先生



教頭
滝澤幸憲先生



校長
菅野光広先生

様性があります。自分一人では難しいことを、多様な力を組み合わせて成し遂げたという経験は、社会で自分の個性を活かしていくことにつながるのではないのでしょうか(菅野校長)

学科間の連携を強化するため、教職員の間でも工夫した。17年度より、学科長を束ねる「学科統括」という役割を設置。その任に就いている篠崎昌彦先生は、現在の連携状況についてこう語る。

「教職員の話し合いで頻繁にあがる言葉があるか」。学科が違っても視点は同じです。お互いの専門性を信頼し、日常的に情報交換や相談をし合っている、同じ方向性で連携できているのではないのでしょうか」

さらに、今後は学年間の連携にも力を入れていくという。その先駆けとなったのが、18年度、農業経営科の2・3学年合同チームによる、矢高ブランドのりんごジュース開発プロジェクトだ。

「2年生がプロジェクトをリードすることで先輩としての自覚を育み、1年生は先輩の姿を目標にするという、学びの多い活動になりました。こうして先輩から後輩へと引き継いで発展させていくような、継続性のある活動を増やしていきたいですね」(篠崎先生)

人とのつながりのなかで成長のきっかけを掴む

こうした地域社会における数々の実践経験を積む同校生徒を見て、篠崎先生は「専門分野の実践力が育っている」

図2 同校の取り組みに対する地域の声

- 特色ある学校づくりの中心になっている地域連携は、学校全体の取り組みとして地域に深く浸透している。
- 初めての試みとして、地域連携成果発表会が開催され、生徒のすばらしい発表を見て感動した。今後も引き続きこのような連携を続け、地域に貢献してほしい。
- 起業家精神育成事業において、コンペティションで選ばれた電子科と社会福祉科と連携した取り組み(介護用スプーン、視覚障がい者向けの段差検知白杖)は、総合選択制専門高校としての強みであり、今後もこのような連携を継続してほしい。
- 農業後継者や社会福祉従事者については社会問題になっている。このような学校の取り組みを企業のシステムづくりや地域就農等の受け皿の整備の参考にした。

(学校評議員アンケート、地域連携成果発表会アンケートより)

と語る。その力を地域の人に認めてもらう機会が豊富にあり、活動成果のコメントに賞状が入ったり、活動の様子が地方紙や地方局で紹介されることも多いなか、生徒の意識も前向きに。入学時は内向的だった生徒が、地域での活動のなかで自信をつけ、クラスや部活動でリーダー役を担うようになった例もあるという。

実践のなかでは当然、思うようにいかないこともあるが、「失敗するからこそ深い学びがある」と篠崎先生。失敗経験から自らの勉強不足を知り、勉強に励むよ

Interview

地域とのつながりのなかで将来像が具体化

● 今年度、初めてJAまつりに参加して、自分たちが育てたシクラメンとりんごを売りました。販売開始と同時に一気にお客さんが並び始めて、1時間もしないで売り切れた。自分たちのやることがこんなに地域の方に喜ばれるのだとわかりました。



私はいちごが大好きなので、卒業後はいちご農園に就職するのが目標です。そこでおいしいいちごを育てるだけでなく、地域の方たちが気軽にいちご狩りに来て楽しんで元気になっていただけるようないちご園を作りたいと思っています。(農業経営科2年・白須麻冬さん/写真右)

● 実習に魅力を感じて、農業経営科に入学しました。実際に学んでみて、今は花の栽培に面白さを感じていて、3年の「課題研究」ではシクラメンを題材に取り組みうと考えています。

JAまつりの販売実習では、お客さんに「がんばってね」などと声を掛けていただいたのが印象に残っています。地域の方に応援されていることを実感し、人とのつながりやコミュニケーションを大切にしていきたいと改めて思いました。(農業経営科2年・石塚美有さん/写真左)

● 矢板の良さを広く知ってもらいたいという気持ちで、レトルトカレー開発プロジェクトにリーダーとして参加しました。しかし、プロジェクトは想像以上に大変。最初にしたレシピは、外部メンバーの方に「矢板についてもカレーについても全然わかっていない」と言われてしまいました。単に「自分たちが食べたいカレー」だったのだと思います。そこから、放課後にみんなで集まって意見を出し合ったり、自宅で味の研究をしたりして、自分でも納得のいくレシピができました。

地域のメンバーの方から厳しい指摘もたくさん頂きましたが、その裏面に温かい気持ちを感じることができ、素直に感謝しています。大変だったけれど、その分やりがいは大きかったです。この経験を通じて、たくさんの方の意見を聞き、全体を見通して一つの方向にまとめていく力がついたと感じています。

卒業後は県内の食品工場に就職します。将来的にはみんなに喜んでもらえる商品を開発する仕事をしたいという目標をもって、がんばっていきたくと思っています。(栄養食物科3年・山田真生さん/写真中央)

うになるケースも少なくない。

近年、学科に関連する分野への就職・進学が目立つという。その背景には、生徒自身が高校の学びと進路を結び付ける選択をするようになったことに加え、専門性を活かした地域活性化活動の経験が面接試験などで評価されていることが考えられる。

「本校が重視しているのは『人とのつながり』です。たとえ自営業でも、一人では生きていくことはできません。本校での経験を活かし、地域のさまざまな人と

つながりを卒業後も大切にしていってほしいと願っています(篠崎先生)

今後も同校は新しいことに挑戦していく方針だ。多彩な活動のラインナップは、質と量の観点から毎年見直される。5年間続けたティサービスも、一定の成果を上げたとして終了し、19年度は新たな活動を模索中だ。

「同じ事を毎年繰り返すだけでは、生徒も学校も成長していきません。常に次の一手を考え、取り組みを進化させていきます(菅野校長)